

児童会・生徒会による 魅力ある学校づくりに係る 取組事例集



三種町立湖北小学校



県立横手清陵学院中学校



羽後町立羽後中学校



湯沢雄勝地域生徒指導研究推進協議会
生徒連絡会



県立聴覚支援学校

目 次

○国立教育政策研究所

「こどもの発達を支える生徒指導に関する調査研究事業」

・ 羽後町立羽後中学校	1
【小学校】	
・ 三種町立湖北小学校	3
・ 東成瀬村立東成瀬小学校	4
【中学校】	
・ 鹿角市立十和田中学校	5
・ 由利本荘市立本荘南中学校	6
・ 県立横手清陵学院中学校	7
【義務教育学校】	
・ 井川町立井川義務教育学校	8
【高等学校】	
・ 県立湯沢高等学校	9
・ 県立湯沢翔北高等学校	
・ 県立湯沢翔北高等学校雄勝校	
・ 県立羽後高等学校	
【特別支援学校】	
・ 県立聴覚支援学校	10

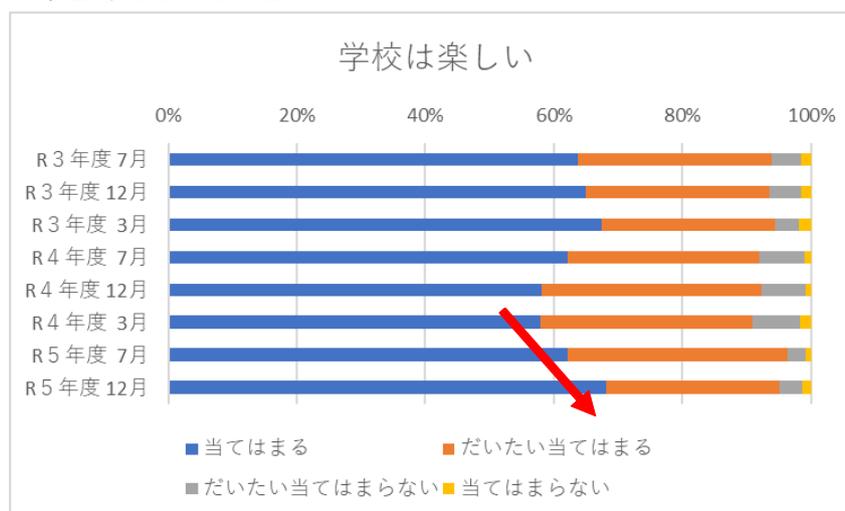
②異学年交流の充実

- 清掃班・・・話したことがない先輩や後輩と関わる。最初はぎこちない雰囲気があるがほどよい緊張感をもって清掃に取り組んでいる。
- 学校行事・・・体育祭では縦割りでリレーをしたり、音楽祭では縦割り合同練習をするなどして、多くの場面で異学年交流を行っている。
- 「先輩に学ぶ」活動・・・テスト前に数日間時間をとって、3年生が分担して1年生と2年生に学習指導をしている。



【3年生による下級生への学習指導】

4 これまでの成果と考えられること



- ・学校生活意識調査の「学校は楽しい」という質問項目で、肯定意見の「当てはまる」の数値が向上した。
- ・全校集会で取り上げたことで、学校は楽しいという状態について、生徒間で共通認識することができた。
- ・全校で特別活動に力を入れたことで、生徒同士が関わり合う姿が増えた。
- ・授業では「自己決定」の場面を大切にするとともに、教師が「生徒指導の実践上の視点」を常に意識するようになった。

5 今後の課題

- ・「学校は楽しい」という質問項目の数値は全ての学年で向上したが、「授業がよく分かる」の質問項目の数値は向上しておらず、生徒に「分かった」「できた」という達成感をもたせるための手立てに課題がある。
- ・県学習状況調査の質問項目にある「自分にはよいところがある」の数値が低く、自己肯定感や自己有用感を育むための仕掛けに課題がある。

学 校 名	三種町立湖北小学校	児童生徒数	84人	学級数	8												
1 活動名	児童自らが考える児童会活動																
2 活動の趣旨	<p>本校の校訓「積善」は、校章の糸巻きに込められた願い「善い行いができた日は白い糸を巻き、善を積み重ねていく」から生み出されたものである。児童は「目指す児童像：せきぜん輝く人」を目指して、個人のめあてを立て、よりよい自分となるよう日々の活動に取り組んでいる。昨年度は、児童会の先頭に立つ積善（運営）委員会が中心となって、「せきぜん輝く人」を目指した委員会活動を活性化させようと「全校積善プロジェクト」を立ち上げた。今年度も、学校生活をよりよくするために児童自らが考え、実践できるような活動に取り組んでいる。</p>		<table border="1"> <tr> <td>せ</td> <td>せいり・せいとん、そうじができる。</td> </tr> <tr> <td>き</td> <td>気持ちのよいあいさつ・返事ができる。</td> </tr> <tr> <td>ぜ</td> <td>全身で話を聞くことができる。</td> </tr> <tr> <td>ん</td> <td>時間をまもり、大切にできる。</td> </tr> <tr> <td>輝く</td> <td>自分には輝くところがあると言える。</td> </tr> <tr> <td>人</td> <td>人のために役立つ・こうげんできる。</td> </tr> </table>			せ	せいり・せいとん、そうじができる。	き	気持ちのよいあいさつ・返事ができる。	ぜ	全身で話を聞くことができる。	ん	時間をまもり、大切にできる。	輝く	自分には輝くところがあると言える。	人	人のために役立つ・こうげんできる。
せ	せいり・せいとん、そうじができる。																
き	気持ちのよいあいさつ・返事ができる。																
ぜ	全身で話を聞くことができる。																
ん	時間をまもり、大切にできる。																
輝く	自分には輝くところがあると言える。																
人	人のために役立つ・こうげんできる。																
3 活動の概要	<p>(1)児童会活動「全校積善プロジェクト」</p> <p>①あいさつ運動【積善委員会】：年間 毎朝、積善委員会の児童が各学級に行き、「おはようございます」と互いに声を掛け合う「校内あいさつレンジャー」を行っている。あいさつに加え、その日一日、特に意識して使う「ふわふわ言葉」を、サイコロを振って決める「ふわふわ言葉運動」も同時に行っている。また、スクールガードリーダー来校日に合わせて、「校門あいさつレンジャー」を行い、学校内だけでなく、学校外でも気持ちのよいあいさつができるように呼び掛けている。</p> <p>②湖北小「逃走中」【体育委員会・保健委員会】：11月 運動会の色分けごとにチームとなり、「ハンター」から逃げることができた人数が多いチームが勝ちとなる。また、一度捕まっても、同じチームの児童が「保健クイズ」に正解すると、もう一度逃げることができる。体育委員会がルールを、保健委員会が「保健クイズ」を考えるという、二つの委員会が協力して企画する活動となっている。</p>																
			 <p>【「保健クイズ」に挑戦する子ども】</p>														
	<p>(2)縦割り班遊び：6月 新1年生や、新しい縦割り班のメンバーと仲を深めることができるように、縦割り班で遊ぶ時間を設定した。学年の異なるメンバーみんなが楽しめる遊びを班長が考え、縦割り掃除後の昼休みに15分程度で行った。</p>																
4 これまでの成果と考えられること	<p>児童会活動を通して、よりよい学校にするためにはどうすればよいかを考える機会を積極的に取り入れてきた。その結果、月に1度行われる3年生以上の代表による代表委員会では、「ふわふわ言葉をさらに使うようにするために、～してはどうか。」「廊下をみんなが歩くようにしてほしい。」といった、よりよい学校にしたいという考えが多く出されるようになった。児童自ら学校をよりよくするのだという気持ちが育まれているように感じる。また、「全校積善プロジェクト」や日常的な異学年交流により、高学年の児童はリーダーシップを学び、自己肯定感や自己有用感の高まりにつながっている。下学年の児童は、高学年の児童へ憧れや親しみをもって接している様子が見られ、縦のつながりが深まった。</p>																
5 今後の課題	<p>学校生活における様々な活動で、主体的に考え、問いをもち、みんなで解決しようとする力を育てていくことが大切である。「全校積善プロジェクト」を引き継ぎながらも、毎年同じ活動内容ではなく、児童自らが新たな活動を考えたり、既存の活動に付け加えたりしていく必要がある。今後も児童がよりよい自分、よりよい学校になるよう、「せきぜん輝く人」を目指して活動していけるように、様々な支援を考えていきたい。</p>																

学 校 名	東成瀬村立東成瀬小学校	児童生徒数	69人	学級数	8
1 活動名	みんなが明るく安心して生活できる学校を目指して				
2 活動の趣旨	<p>本校の児童会活動では、小規模校のよさを生かし、縦割り班による活動を通して異年齢交流を多く行っている。様々な活動を通して、お互いに認め合ったり高学年児童がリーダーシップを発揮したりして、自己有用感が高まっていくことを目指している。</p>				
3 活動の概要	<p>(1) 人と関わる喜びを育む異年齢交流</p> <p>① 6年生による縦割りクイズラリー 6年生が中心となって、縦割り班によるクイズラリーを行った。企画・運営を児童に任せることで最高学年としての自覚が高まり、達成感を味わうことができた。また、縦割り班で協力してクイズを解くことを通して、児童同士の絆を深めることができた。</p> <p>② メディアールの検討会 ゲームや動画の視聴に係るルールづくりを全校児童で話し合っ行って行った。縦割り班ごとに集まって1年生から6年生まで様々な意見を集約し、1つのルールにまとめていった。話し合いの過程において、あくまで児童が主体となってルールづくりを行ったため、「自分たちで話し合っ決めて決めたルールだからしっかり守る」という意識を高めることができた。</p> <p>③ 縦割り班による清掃活動・花の水やり 縦割り班による清掃活動では、事前に6年生が役割分担を考え、上学年と下学年がペアになるようにしている。上学年が掃除の仕方を下学年に教え、一緒に掃除をしている姿が多く見られる。花の水やりも同じ縦割り班で分担を決めて、自分たちが植えた花に水やりをしている。生き物の命を大切にするとともに、自分に与えられた役割を果たす責任感が育まれている。</p> <p>(2) 各学年、委員会によるミニ集会 毎月、各学年や委員会による発表やお知らせの集会を実施している。発表後には、近くの友達と集まって感想を交流する時間を設定している。感想発表の際には、各学年から1名ずつ指名して発表を行っているが、学年が上がるほど話す内容が充実していくので、下学年の児童のよき手本となっている。</p>				
4 これまでの成果と考えられること	<p>休み時間には、学年問わず一緒に遊ぶ姿が見られるようになってきた。また、年4回行う「心と体の健康チェック」では、心の不調を訴える児童が減ってきている。</p>				
5 今後の課題	<p>児童数減少に伴い、これまでどおりに実施することが困難になってきている活動があるため、規模を縮小したり、新しい取組を考えたりしていく必要がある。</p> <p>また、より児童の声を取り入れ、児童主体の自治的な活動となるよう取組を創意工夫していく必要がある。</p>				
					<p>【6年生によるミニ集会の発表】</p>

学 校 名	鹿角市立十和田中学校	児童生徒数	2 1 2 人	学級数	1 0
-------	------------	-------	---------	-----	-----

1 活動名

異学年集団との絆を深める全校集会と生徒総会での全校討議

2 活動の趣旨

本校の生徒会では、異学年との関係性を更に向上させ、その効果を縦割りで行う総合的な学習の時間をはじめ様々な活動に波及させようと考え、数年前から生徒会が主体となって異学年との交流を深める全校集会（レクリエーション）を定期的に行っている。また、全校生徒が集まる生徒総会（年2回）では、全校生徒の考えを職員も含めて共有する場と捉え、校則や学校生活に関するルールなどの改善点や地域の課題について全校討議を行い、意見交流も行って来た。

さらに、生徒の表現力の向上や人前でも堂々と自分の考えを伝えられる生徒を育成するために、毎週木曜日に学年集会でスピーチの場を設定し、表現力の向上に取り組んでいる。

3 活動の概要

- (1) 4月 全校集会「全校の絆を深めよう」
- (2) 5月 生徒総会（全校討議実施）
生徒会ラジオ「〇〇先生について知ろう」
- (3) 6月 全校集会「チームプレーで風船を落とすな」
- (4) 9月 十中祭スタートアップ集会「全校生徒一丸となって十中祭を成功させよう」
- (5) 11月 生徒総会（全校討議実施）
- (6) 通年 学年集会の実施（生徒が主体となって運営、エンカウンター的な活動の実施、スピーチの場の設定）

4 これまでの成果と考えられること

人前での発表が苦手な生徒が多かった印象があったが、最近では、学級内だけでなく異学年がいる全校討議や専門委員会の場でも、自分の考えを発表できる生徒が増えてきた。また、表現することに慣れてきたおかげで、合唱や十中祭でのステージ発表の質も年々よくなってきている。縦割りでの活動についても、生徒たちが数年経験したことにより、上級生がリーダー役として指示を出したり意見をまとめたりする姿が多く見られるようになってきた。



【全校討議の様子】

異学年と交流することで、全校としての一体感が生まれ自然と協力しようという雰囲気が醸成されてきた。また、上級生がリーダー役として活動をやり切ることで自己有用感が高まり、学校外でのボランティア活動に進んで参加する生徒も増えてきている。このようなよい経験を積んだ生徒たちが、学校以外の場所でも活躍の場を見付け、地域の活性化に貢献する役割を担っていくことを期待している。

5 今後の課題

どの活動でも数年続けていくとマンネリ化してしまうことが多い。活動内容のベースは変えずに生徒たちの興味・関心を高められる活動を教師側も考えていく必要がある。また、縦割り活動の目的やよさを教師が十分理解するとともに、生徒たちにもしっかりと伝えていく必要がある。

生徒数が減少している中で、異学年と連携をとって活動を進めていくことは、授業や行事などの質を向上させることにもつながるので、生徒たちが更に主体的に様々な活動に取り組めるように支援していきたい。

学 校 名	由利本荘市立本荘南中学校	児童生徒数	272人	学級数	10
-------	--------------	-------	------	-----	----

1 活動名 自己肯定感と自己有用感を育む主体的な生徒会活動

2 活動の趣旨

本校の生徒会では、新しいことに挑戦することで、今までとは違った未来が見えてくるという思いの下、小中合同会議を土台とした活動を行っている。また、いじめの未然防止として、温かい環境づくり（共感的人間関係の形成）を目指した取組も行っている。

3 活動の概要

(1) 小中合同あいさつ運動

生徒会総務が中心となり、年8回程度、登校時にあいさつ運動を行っている。主な活動内容は、本校の生徒会総務と生活部に加え、南中学区の小学校の6年生が各校の玄関前と主要な通学路（3箇所）であいさつ運動を行っている。なお、学校運営協議会の委員の呼び掛けで、この取組に地域の町内会長や民生児童委員も参加するようになり、地域で互いに爽やかなあいさつを交わし、清々しい一日をスタートすることができている。



【玄関前であいさつ運動をする児童生徒たち】

(2) 南中きらきら星（「ありがとう」を伝える掲示板）

生徒たちが感謝している人（友達や先生、コーチ、家族、地域の方々）へ、星形のカードにメッセージを書き、生徒玄関前のボードに掲示している。生徒たちは、朝や昼休み、帰る時などにボードを見て、温かい気持ちになって学校生活を過ごしている。この取組は、本校の生徒会役員が参加した大阪府箕面市との学校交流からヒントを得て行ったものである。

(3) いじめ防止を呼びかけるビデオ作成

普段何気なく使用しているSNSで、ちょっとした行き違いからいじめに発展してしまう事例を生徒会総務が中心となってビデオにまとめ、全校集会で視聴し、いじめ防止を呼び掛けた。なお、このビデオを学校運営協議会で紹介したところ、中学校区の小学生にも視聴させた方がよいと勧められ、生徒会総務が小学校を訪問し、ビデオを紹介した。中学校の取組を受け、次年度は小学校でもいじめ防止の動画作成に取り組む予定である。

4 これまでの成果と考えられること

- ・校内や通学路でさりげなくあいさつできる児童生徒が増えてきている。また、登下校中に横断歩道を渡った後、停車してくれたドライバーに会釈する姿が見られ、地域の方から感謝と激励の声が届いている。
- ・きらきら星のメッセージやビデオ作成を通して、自己肯定感や自己有用感が育まれている。また、毎年開催している学校祭では、「友情」や「愛校心」などをテーマに含んだオープニングビデオを作成しており、その視聴を通して、全校生徒が学校生活に対して充実感や達成感を味わっているように感じる。
- ・あいさつへの意識の高まりが見られ、生徒総会では、あいさつの意義を質問した生徒に生活部長が回答する場面があった。このことにより、全校生徒があいさつの意義を再確認して学校生活で実践することができるようになってきている。
- ・小中連携して活動を行うことで、新入生が戸惑うことなく新しい中学校生活をスタートできる一助となっている。

5 今後の課題

自ら進んで行動することをためらう生徒も見受けられるため、今後も生徒主体の活動を継続することで、一人一人の自己肯定感や自己有用感を育み、温かい人間関係のもとで、未知のことに挑戦しようとする南中生を育成していきたい。

学 校 名	秋田県立横手清陵学院中学校	児童生徒数	80人	学級数	3
-------	---------------	-------	-----	-----	---

1 活動名

縦割り活動を中心としたもう一歩踏み込んだ絆づくり

2 活動の趣旨

開校から20年。中高一貫教育校である本校生徒の通学区域は、大仙地区から湯沢地区までと広い。本校の生徒会では、全校生徒の一体感や上級生の自己肯定感及び規範意識を高めるとともに、下級生が上級生の姿から自分の目指す姿を明確化できるよう、校内外でのボランティア活動、学校行事、なべっこなどで縦割り活動を取り入れている。

3 活動の概要

(1) 交流会の実施（5月：全校生徒）

グルーピングとグループエンカウンターを行い、班内での交流を深めた。入学して間もないため、まだ緊張している1年生に対して3年生が優しくリードする姿が見られた。

(2) 花いっぱい運動（6月：総体に参加しなかった生徒）

プランターに花を植え、地域に配布する活動を行った。縦割り班ではないが、初めて経験する1年生に上級生が示範しながら花植えを行った。

(3) なべっこ活動（10月：全校生徒）

生徒が企画・立案した。1年生には生徒会執行部からプレゼンテーションを行い、その後、班で役割分担やプラス1品のメニューを決めて行った。火起こしや調理の場面で上級生が下級生に教えながら活動した。

(4) 学校祭前日祭での生徒会企画の縦割り発表会（10月：全校生徒）

学校祭の前日祭で、班ごとに3分間ずつの出し物を互いに発表し合った。内容は、劇、ショートムービーなどバラエティに富んだものであった。短い練習期間だったが、3年生がリーダーシップを発揮し、下級生もアイディアを出し合いながら活動を行った。



【上級生に教えてもらいながらのなべっこ調理】

(5) 探究Jr.（総合的な学習の時間）発表会（7月・12月：全校生徒）

司会進行は3年生が行い、活発な質疑応答と意見交流があった。

(6) 高校生と合同チームを組んでの体育祭（6月：中高全校生徒）

本校では、中高一貫校の特色を生かし、高校のクラスと中学校のクラスがチームを組み、体育祭を行っている。合同練習では、高校生が中学生に種目の説明を行い、一緒に練習を行った。中学生は、高校生が率先して仕事をする姿や力強いプレイを見て、自分の目指す姿をイメージしていた。

4 これまでの成果と考えられること

日常の活動と異なり、上級生が企画・立案や話合いの進行等の役割を率先して行い、リーダーとしての姿を下級生に示すことで、下級生によい影響を与えていた。このように、縦割り活動を通して、生徒自身が将来上級生として目指す姿やあるべき姿を具体的に捉えることができた。また、生徒会役員選挙では、立候補者全員が「本校の少人数の魅力として縦割り活動をさらに拡大させていきたい」と提案するなど、生徒の中でも大切な活動であることが浸透してきている。

5 今後の課題

本校では、人と関わる力を更に高めていきたいと考えている。だからこそ、生徒同士が絆づくりのできる機会を設定し、異学年との関わりの中で、自己存在感や共感的な人間関係を育む活動が重要だと感じている。そのためにも、活動を通して育てたい資質・能力をより明確にし、3年間の系統性や事前事後の活動との整合性が図れるよう改善、修正していくことが必要である。引き続き、少人数の本校だからこそできる「もう一歩踏み込んだ絆づくり」を生徒会と共に考え、実践していきたい。

学 校 名	井川町立井川義務教育学校	児童生徒数	196人	学級数	15
-------	--------------	-------	------	-----	----

1 活動名 1～9年生による縦割り班活動の交流を通して育むリーダーシップと思いやりの心

2 活動の趣旨

本校では、義務教育学校の特性を生かし、1～9年生の児童生徒全員が参加する学校行事や集団活動の場を多く設定している。その際、主体的に活動に取り組めるよう、活動前に自身の役割を考えて、発達の段階に応じたためあてや目標をもたせるようにしている。

3 活動の概要

(1) 縦割り班活動

① 縦割り班集会

昼のいかわっ子タイムを利用した、縦割り班の交流活動である。5～9年生の代議員が中心となり、5月の出会いの集会から定期的で開催し、様々なレクリエーションを通して交流を深めている。



【縦割り班集会の様子】

② なべっこ会（10月実施）

メニュー決めから、買い出し、調理に至るまで、縦割り班の9年生のリーダーを中心に活動した。メニュー決めでは、1～9年生全員が食べられるメニューやアレルギーなどの有無を考え、さらに今年度は、児童生徒会で完食賞を用意し、フードロスを意識して買い出しや調理に工夫して取り組んだ。

(2) キラッとさん、ありがとう貯金

帰りの会で、その日活躍した「キラッとさん」を紹介している。また、行事があるときは、他学年の「キラッとさん」を見付けている。その「キラッとさん」を玄関に掲示して紹介することで、全校児童生徒が他の人のよいところに気付くことができるようにしている。

「ありがとう貯金」は、日頃伝えることのできなかつたありがとうやみんなに紹介したいありがとうを玄関に掲示している。そして、「ありがとう貯金」を増やしていくと児童生徒会が構想する「井川みらいタウン」に少しずつ施設や建物が増えていく。「キラッとさん」「ありがとう貯金」を月1回全員に書いてもらうことにより、他の人のよいところに目を向け、互いに認め合うことができるように環境を整えている。

(3) Life Up Day

メディアの使用時間を見直し、メディア以外で自分の生活を充実させようという活動である。5～9年生は毎週木曜日の朝に目標を決め、その日の放課後に目標を意識して取り組む。金曜日に振り返りをして、自身の生活を見直している。夏休みには各家庭にも協力をお願いし、全校で実施したことで、家庭でもメディア使用時間を見直すことができた。

4 これまでの成果と考えられること

継続的・計画的な縦割り班活動により、1～9年生の関わりがとて深くなり、自然と上級生は下級生の面倒を見たり、下級生は上級生の真似をしようとしたりする姿が見られた。さらに、縦割り班活動に系統性をもたせたり、活動前にためあてや目標をもたせたりしたことで、自分の役割を考えながら主体的に取り組む児童生徒が増えた。また、全校で振り返り用紙を統一し、異学年のよさを見付ける活動を取り入れたことで、互いに認め合う心が育まれ、人のよさを積極的に探そうとする姿が見られた。

5 今後の課題

今後も児童生徒が主体となり、学校の実態に合わせた活動を企画、運営することが必要である。行事のときだけ何か特別なことをするのではなく、日常的に児童生徒が称賛し合うことを意識して生活できるよう、教職員を含めて全校で取り組んでいくことが大切であると考えている。

学 校 名	秋田県立湯沢高等学校	児童生徒数	418人	学級数	15
	秋田県立湯沢翔北高等学校		500人		15
	秋田県立湯沢翔北高等学校雄勝校		35人		3
	秋田県立羽後高等学校		102人		5

1 活動名 湯沢雄勝地区4校合同プロジェクト「あさがおカレンダー」

2 活動の趣旨

湯沢雄勝地区の4校が協同し、地域全体でSNS上の誹謗中傷やジェンダー問題、いじめ問題等の課題について理解を深め、これらの問題解決に向けた取組を共に学び、実践していくことを目指している。

3 活動の概要

(1) 4校の生徒会代表者が集まる湯沢雄勝地域生徒指導研究推進協議会の生徒連絡会において、「あさがおカレンダー」制作に関する協議を行う。会議では、生徒から募集する標語のテーマ、各学校が制作を担当する月と完成したカレンダーを地域の中学校に配布する担当を決める。

(2) 11月上旬までに、各校において3つのテーマで標語を募集する。令和6年度のテーマは次の①～③とした。

①生活マナーの向上

挨拶や自転車のヘルメット着用、ながらスマホの禁止等、日常生活を送る上でのマナー向上を呼び掛ける。

②SNSトラブル防止

誹謗中傷をなくし、安全・安心なSNS利用を促進する。

③個人の尊重

ジェンダーや個性、それぞれの生き方を尊重し、いじめを防止し、よりよい高校生活を送る。

(3) 12月上旬までに、各校の標語に合うイラストの作成をする。

(4) 12月末までに、各校の成果物をまとめたカレンダーを制作し、各校のHR教室、職員室、生徒玄関等に掲示するとともに近隣中学校に配布する。



【あさがおカレンダー（6月）】

4 これまでの成果と考えられること

平成27年に湯沢翔北高等学校生徒会が始めた「いじめ防止標語カレンダー」は、今では4校が協同し、地域全体に広がる活動に成長した。当初は「いじめ防止」に特化していたが、時代とともにテーマを広げ、現代社会が直面する様々な問題に取り組むようになった。この活動を通して、生徒たちは社会問題への関心を深め、自ら課題解決に取り組む姿勢を身に付けている。これらの成果は、地域全体の教育環境の向上につながり、よりよい社会の実現に貢献している。

5 今後の課題

配布先を、近隣の小学校や地域の様々な施設まで広げて、地域全体の連携と理解・協力を得たいと考えている。しかし、限られた予算の中で、いかに、より多くの施設にカレンダーを届けるかが課題である。また、この取組の意義を常に明確にし、4校の全生徒で活動の目的を共有することで、マンネリ化を防ぎ、持続可能な活動にしていきたい。

学 校 名	秋田県立聴覚支援学校	児童生徒数	19人	学級数	14
-------	------------	-------	-----	-----	----

- 1 活動名
- | |
|---------------------------|
| 1 全校ふれあい活動（7月・2月） |
| 2 中学部高等部生徒会企画（学習発表会「秋豊祭」） |

2 活動の趣旨

本校は、幼稚部年少児（3歳）から高等部専攻科2年（20歳）まで、幅広い年齢の幼児児童生徒が同じ校舎で過ごしている。在籍数は少なくなったが、生徒会が主体となって実施する活動を継続し、少ない人数ならではのよさを生かした縦割りの活動を大切にしている。

3 活動の概要

(1) 全校ふれあい活動（7月・2月）

毎年夏と冬に、中高生徒会執行部が、幼稚部幼児及び小学部児童と一緒に遊ぶ活動を設定している。7月に水遊び、2月に雪遊びと季節の遊びを中心に企画・実施し、外での活動が難しいときには、ホールでの鬼ごっこ、じゃんけん列車など小さい子どもたちが楽しめる活動を行っている。生徒の提案により、活動日の一週間程度前から、昼休みに小学部のホールに行き一緒に遊ぶことで、関係づくりを図っている。当日は、職員は遊びに入らず支援を控えるため、生徒同士が声を掛け合っ子ども安全を確認する様子も見られた。関わる場面では、自然と視線を合わせて話しかけたり、子どもの動きに合わせて優しくサポートしたりする生徒も多く見られた。



【幼児と視線を合わせて遊ぶ高等部生徒】

(2) 中学部高等部生徒会企画（学習発表会「秋豊祭」）

以前は中学部と高等部に分かれて実施していたが、今年度から合同で開催した。学習発表会期間はステージ発表練習と並行して、生徒が協力して準備を進めている。学習発表会当日の午後に実施しており、幼児児童は毎年生徒会の企画を楽しみしている。当日は生徒同士が役割を決め、子どもたちを楽しませながら自分たちも一緒に楽しんでいる様子が見られた。



【高等部生徒と対戦し、勝って喜ぶ児童】

4 これまでの成果と考えられること

全校の幼児児童生徒が日常の学校生活や行事で顔を合わせることが多く、活動も定着してきているため、幼児児童は高等部や中学部生徒と遊ぶことを楽しみにしている。また、参観している幼稚部の保護者にとっては、我が子の成長に見通しをもつロールモデルともなっており、有意義な活動と言える。

生徒会を中心とした活動は、中学部高等部生が、運営する側の視点に立って、どうすれば小さい子どもたちが安全に楽しめるかを話し合い、またそれが予算的な問題も含めて実施可能かどうかを考慮して企画・立案していくことになる。これは主体性を育むとともに、よりよい人間関係を構築し、所属感や連帯感を深めることにもなり、学校行事の充実にもつながる重要な活動と言える。また、振り返り活動で、子どもたちから「楽しかった」「もっとやりたかった」「また別のことをやってほしい」などといった声が挙がることで、達成感や充実感を感じ、次の企画への意欲が喚起され、自己有用感や自己肯定感の醸成にもつながっているように感じる。

5 今後の課題

本校の在籍人数が減ってきており、内容や実施方法の再検討が迫られている。特に屋外での活動は、猛暑や雪不足に加え熊対策などもあり、活動が制限されることもある。今後は、幼稚部や小学部の行事（ハロウィン、節分、クリスマス会などの年中行事）に中高等部が協力していくという形も考えられる。少人数のよさを生かしながら、他者とのふれあいを保障する意味でも継続していきたい活動である。また人数の減少に加え、在籍児童生徒の障害の多様化もあり、児童会生徒会の自治会運営が困難になる中で、より主体的に組織運営に関わることができる活動をさらに工夫していく必要もある。



井川町立井川義務教育学校



鹿角市立十和田中学校



東成瀬村立東成瀬小学校



由利本荘市立本荘南中学校